

第八十四号

柳井市白壁の町並みを
守る会
事務局(皿田治)
TEL:090-1012-4204

第二十一回 八朔の船流し

今年実施すべきかどうか、「to do or not to do」...ハムレットになった気分です。正直悩みました。これまで二十回も続けて来た白壁通りの伝統行事。いくらコロナ禍の最中とは云え、「はい止めました！」でいいのかわるか?一人では決められず役員会にはかることになりました。七月二十



六日、町並み資料館に集まった役員は総勢七名。事務局としては中止を提案の上、一人ずつ順番に意見を伺ったところ中止の意見三名、条件付きで実行したらどうかの意見三名

となり最後は木阪会長の番となったのであります。実はこの行事はマスクミの取材(民放二社、ケーブルテレビ、地元新聞二社、全国紙数社)も多く、また県内外からのカメラ愛好家、参加女生の親族など多くのギャラリイが集まり、狭い絶好の撮影スポットの争奪戦が毎回繰り広げられるため、三密を避けるどころか「三密の見本とはこうだ」と云っても過言ではない状況を呈する場なのであります。実行の際の条件とは三密を避けるため、マスクミに対しても誰に対しても一切知らせないで、秘密裡に実行すると云うものでした。最後の一票を握った木阪会長が条件付き実行に賛成し、八月九日の開催が決定されました。



当日、町並み資料館に集まったのはマスク姿の柳井中学の女生十二名。毎回参加していた柳井学園高校は看護科があ

り、万一感染者が出た場合には実習や学業に影響が出るため止む無く辞退。参加希望をされていた女生生はさぞかし残念だったことと思います。頼母船を流す舞台となる河川棚には予め二メートル間隔の目印を貼り、今回は漁師さんの意見に従い満潮の後の潮泊りをこれまでの十五分ではなく一時間とり、午後一時としたが、風が川下から川上向きと逆方向に吹いたため、スムーズに船が川下に流れてくれなかつたものの、コロナ禍で無事終了することができ本当に良かったのであります。



当日参加してくれた柳井中学の生徒の皆さん(敬称略)は、三澤彩乃、加藤綾菜、岡崎華、國嶋ののか、林山七海、宗広未来、萬谷帆南、河田幸桃美、杉本夏美、白根よつ葉、三澤佳歩、野田怜果の皆さんでした。なお、この頁の写真は岩谷昇平氏より頂いたものです。いつも有難うございます。(事務局 皿田)

白壁の打ち水企画に思う

会長 木阪泰之

最高気温が三十四・一度まで上がった八月十三日、当会員や地域の皆様に“柳井白壁の打ち水”の願いをさせて頂きましたところ、夕方の慌ただしい時間帯にもかかわらず、幅広い年齢層から延べ十数名方のご協力を頂きました。また中国新聞社様には取材のお申し出を頂戴致しました(八月二十一日付朝刊・岩柳版にて掲載)。

当日は、前週の八朔の船流しでも参加いただいた柳井中学校一年の三沢佳歩さんは、祭りに着ていく予定だった「浴衣姿」で参加され、石畳に弾けるきらめきと共に彩を添えて頂きました。打ち水は、日陰の路面で行うと体感温度が約一度下がるとして環境省も推奨しています。とても小さくささやかな企画ではありましたが、内部より提案頂き且つ予想を超える方々にご協力いただいたことに、驚きと体感以上の清涼感を得たのは私だけではないと思います。来年も継続してみたいと手応えを感じた夏の日でした。ご協力、ありがとうございます。



【写真左：皿田家前で、皿田事務局長も浴衣姿で。写真右：国森家前で、三沢佳歩さん。撮影、岩谷昇平氏。】

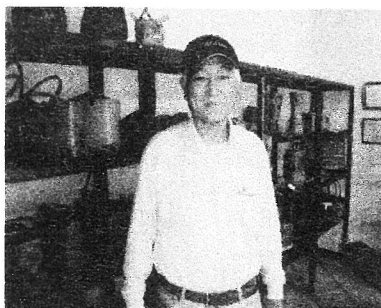
今期新入会員からのお知らせ

柳井竹細工教室会員の作品展示及び販売を十一月二十三日(月曜日)午前十時より午後三時まで白壁通り「竹友公房」にて行います。

当日には、ご来店の方先着三十名様には粗品(竹トンボ・指輪・一輪挿し)を差し上げますので、よろしくお願いいたします。また、売上の一部は社会福祉協会の方に寄付をさせていただきます。

尚、ご来店の際はマスク着用をお願いいたします。当公房の場所は重枝醤油店の左隣、琴陽看板店の正面です。皆様方のお越しをお待ち申し上げます。

竹友公房 代表 安原勝實



第二回柳井弘前交流会開催

会員 河本昌記

八月三日、昨年に引続き今年も青森空港に降り立った。目的は「第二回柳井金魚ちようちん弘前金魚ねぶた交流事業」のお手伝いである。

今年はコロナ禍の影響で弘前ねぶた祭りも中止、柳井から同行の同志の姿もなく一人旅での弘前行きとなった。

こんな状況下で山口からの来県者を受け入れてくれた弘前の関係者の方々、事前の準備・打合せをしていただき気持ちよく送り出していただいた柳井の関係者の方々にまずはお礼を申し上げます。

今年の交流事業は昨年と場所を変え、百石町展示館で行った。この展示館は明治時代に建てられ文化財にも指定されており、弘前城にも程近い観光スポットである。場所的にも最適で、改めてねぶた祭りが開催



されていけば...
と思うような立地であった。
開催期間は昨年同様三日間で、柳井の金魚ちようちん祭りのポスターや風景、

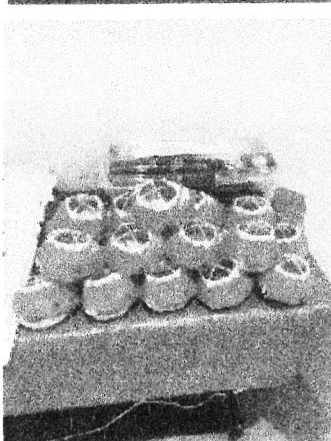
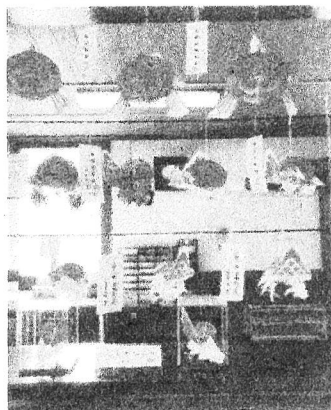
伝建地区の紹介や柳井の四季のイベントを紹介するなど昨年と同じような展示品を用意した。昨年と大きな違いは柳井の名産品を持つて行つて物販をした事である。この管理が自分のメインの仕事で、この店番の為に言つても過言ではない。

物販の様子は後ほど報告させてもらおうとして、今年の展示で特に面白かったのは弘前金魚ねぶたである。青森県内の金魚ねぶたは地域によつて(原型となる型は同じだが)色合いやヒレの形が微妙に違つており、見る人が見ればどここのねぶたか分かるという展示だった。

そうそう、書き忘れるところだったが、今年も幻の金魚「津軽錦」もちゃんと鎮座してイベントを見守つてくれていた。

今年から始まつた物販コーナーでは柳井の名産品の販売とともに金魚ちようちん製作体験、弘前金魚ねぶた絵付体験といった有償体験コーナーを設け、より柳井を身近に感じてもらうイベントも開催した。

三日間での来場者数は平日のみの開催だったにも関わらず二〇〇名を超え、中には娘さんが柳井に嫁いだという方、仕事関係の



友達が下松にいたので遊びに行きたいといった方、去年の展示会をきっかけに柳井に行つてみたなんて方もいらつしやつて関心の高さ、弘前の街に徐々に柳井が浸透していくのを、肌で感じる事が出来た。

製作体験で作つてもらつた金魚ちようちんも、「可愛いので家に飾ります」という方がほとんどで、遠く離れた弘前の街の家の中に金魚ちようちんが泳いでる姿を想像して思わずにやけてしまつたりしていた。

三日間多くの方が来場してくれたが、非常に歓迎ムードで多くの方々によく来てくれたと声をかけて頂いたことがありがたかった。

第三回の来年に向け何ができるか、点ではなく線のつながりを長く続けて行きたいものである。

【写真説明…(上から)
・百石町展示館
・各種青森金魚ねぶた
・金魚ちようちん製作体験コーナー
・物販コーナー】

柳井の地図絵図

岸田稔明

第二十七回 陸地測量部五万分一地形図 「柳井津」(国土地理院蔵)

今回は、陸地測量部(国土交通省国土地理院の前身)が作成した『五万分一地形図「柳井津」』を紹介する。

前々回、前回と二回にわたり紹介した『二万分一地形図』だが、財政難のため、明治二十三(一八九〇)年に基本図の縮尺は、より広い範囲が地図に収まる『五万分一』に変更された。今回紹介する地形図は、『五万分一』に変更されてから初めて発行された柳井津の地形図で、測図は明治三十二(一八九九)年、発行は明治三十五(一九〇二)年である。

第二十五回で紹介した地形図との大きな違いは、柳井に鉄道が敷設され、「柳井津駅」が開設されたことである。「柳井津駅」は明治三十(一八九七)年九月二十五日に山陽鉄道広島〜徳山間が開通したのと同じ



に開設された駅である。当初は同年九月二十三日に開業式典を柳井津で開くことが予定されていたが、

赤痢が流行していたため、急きよ岩国駅に変更されたとのことである。

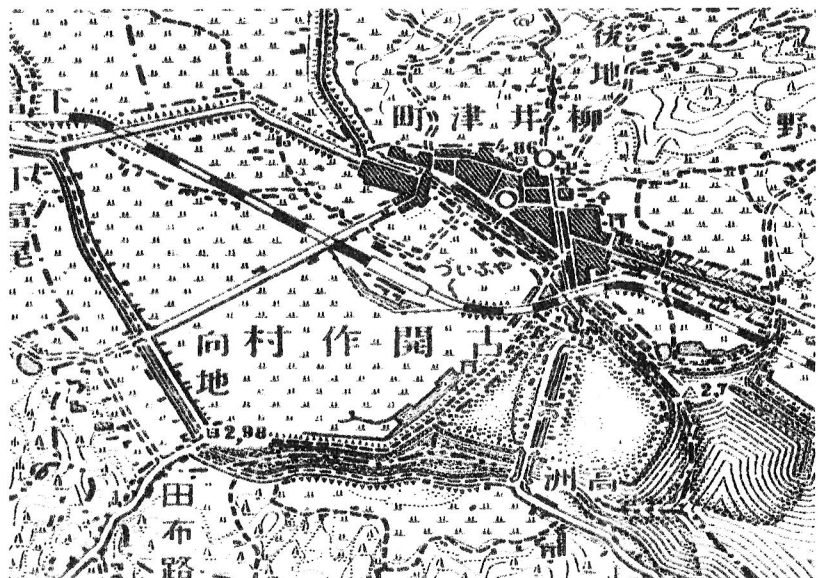
開業当初、岩国〜徳山間には、藤生、由宇、大島、柳井津、田布施、島田、下松の各駅が開設され、柳井津駅には機関庫が設置された。現在のミスターマックス柳井店の敷地に昭和五十九(一九八四)年まであった柳井機関区の前身である。地形図の駅の南側は機関庫の敷地である。昭和十九(一九四四)年に敷地が拡張されるまで、宝来橋から平生方面への道は直線で、踏切もあった。

柳井津駅は、当初新市に開設される予定だったが、近くに港(柳井西港)があり、「船に影響がある」「煙が迷惑」と反対され、古開作村の現在の位置につくられたといわれている。もし新市に駅が開設され、鉄道が当初計画のとおり平生・室積経由となっていたら、柳井の町の構造も根本的に変わっていたものと想像できる。

結局、駅は古開作村の田んぼの中に開設され、現在の本橋から駅へつなぐ道がつくられたが、この地形図では、駅通り(現在の麗都路通り)沿線には建物が数軒しかなかったことがわかる。また、開業当初、本橋や本橋通りはなかったため、緑橋か両運橋を使って迂回する必要があった。

明治三十四(一九〇一)年に、山陽鉄道は馬関(現・下関)まで開通したが、明治三十六(一九〇三)年度の柳井津駅利用者数は、県内では三田尻(現・防府)、下関、小郡(現・新山口)に次いで四番目に多く、

県東部で最大の利用者を誇る駅だった。



陸地測量部5万分1地形図「柳井津」(国土地理院蔵)



開業間もない頃の柳井津駅周辺
(谷林博『ふるさとの思い出写真集
明治大正昭和 柳井』より)



明治40。(1907)年頃の柳井津駅
(藤田文友堂『柳井津案内』より)

商部柳井の歴史 その十四

松島 幸夫

柳井津の経済発展(七)

豪商が取り扱った菜種油

前回は、柳井木綿について記しました。柳井津の商人たちが、問屋制家内工業のシステムを確立し、検印制度を設けて良品だけを出荷し、大坂などの消費地で人気を博したのです。

今回は、それ以上の収益をもたらした菜種油について見てみましょう。

1 菜種油の需要拡大

「むろやの園」の入り口には「御油處」の看板が置かれ、国森家の店内の柱には「梅香艶出し油」の表示が掛っています。新興商人である両家ともに、菜種から絞った油を製造販売していました。

「梅香艶出し油」とは整髪油で、菜種油



に香料を混ぜて販売していたのです。国森家の前身名である守田家は、享和三年(一八〇三)に菜種油の製

造販売を開始しています。

柳井津の商人たちは、種々の商品を取り扱いましたが、菜種油が最も多大な利益を生み出しました。しかも新興商人が取り扱うには、もってこいの商品でした。需要が爆発的に伸びたために、新規参入が容易だったのです。

江戸時代も後半になると、江戸、京都、大坂などの都市部においては、夜が更けても活動する人々が増えます。学問をしたり、遊興に夢中になったり、行灯を用いることが増えました。当然、菜種油の価格は高騰します。利幅が大きくなり、柳井津町でも製油量を増やしたり、新たに油問屋を立ち上げたりしたのです。

2 菜種油の製造

柳井津の油問屋は、周辺の村々の農家に菜種を栽培させて、できた菜種を買い取って店に持ち帰ります。問屋の屋敷地は短冊形に長く設定してあります。店の奥には製油のための作業蔵を建てて、釜を並べ、免木と称する搾油の機械を置きました。菜種を釜で茹でて柔らかくし、免木で絞って油を抽出するのです。屋敷地の裏側、つまり柳井川に面しては雁木(がんぎ)を造り、川船をつないでいました。製品を川船に乗せて川を下り、沖港で大型の回船に乗せ換えて、大坂などに出荷したのです。

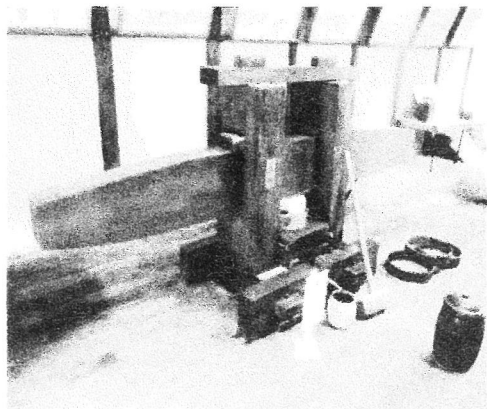
3 製油業の繁栄と撤退

出荷量が増えると、柳井津町周辺の村々で栽培した菜種だけでは足らなくなります。

回船で九州や日本海側沿岸に出かけて、多量の菜種の買い付けをしました。増産に増産を重ね、柳井津産の油は広く知られるようになります。一時は、三重の四日市と長州の柳井津が、二大産地であったと言われている。

その動向に対し、幕府は菜種原料や油製品の流通を制限する統制をかけてきます。農家への貨幣経済の拡大を抑え、都市生活者の贅沢を阻止しようと考えたのです。

柳井津の油問屋は、幕府統制の監視の目をかい潜って、活発な経済活動を展開しました。油問屋の棚卸帳には、原料である「菜種」のことを「からし」などと偽った記入をすることがありました。役人の目を欺こうとしたことが分かります。しかし、時に厳しい監査が入り、偽装が発覚しました。摘発された場合は一定期間、商活動を差し止められました。商人にとっては、店の存続にかかわる極めて厳しい処分です。



【 むろやの園の免木 (油絞り具) 】

柳井津町では、次第に製油業から手を引くことになりました。

資料館便り

『明るい兆し』

副会長 山近絹代

今月に入ってもまだバスツアー等の団体は来れないが、山口県内の小中学校の修学旅行・社会見学で、多くの生徒・学生さんが来られている。

修学旅行で関西に行く予定が、新型コロナ騒ぎでダメになり、長崎に変更したがこれもダメで、県内になった学校も・・・。

七月下旬にGOTOトラベルが始まり、待つてましたとばかりに、それを利用して遠くから来られた方も多かったです。村岡知事の県内旅行をPRするテレビCMもあり、県内各地から来られ、「県内にも良いところがたくさんありますね」と言われていた。足元を見直す良い機会になったのでは・・・。

コロナ禍においても、「二度来てみたかった、来て良かった」と、古い町並み愛好家が、全国から来てくださっている。東京、名古屋から、日帰り、「柳井の白壁」を目的に来られた方もあった。

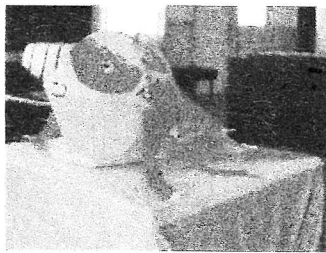
長雨、猛暑の影響もあって七、八月は例年より入館者が少なかったが、九月は、シルバーウィークの人数がすごく、ここ四年で最も多かった。「こんなに多いと思わな

かったので、仕入れてなく、最後の日は売るものがなく店を閉めた」と言われるお店もあった。シルバーウィークとはいえ、年輩者は少なく、若い人がほとんどだった。

先月、昔の金魚ちようちんが復元され、お披露目された。これは、松岡睦彦先生の「今のうちに正しく金魚ちようちんの歴史を伝えておかねば」との強い思いで、金魚ちようちん再現プロジェクトが立ち上げられ、皆さんの協力のもと復元され、金魚ちようちんの学習会も開催された。

柳中美術部では、弘前と柳井の、金魚ちようちんをめぐる関係を題材にした電子紙芝居を作成、文化祭で披露する予定である。十二月にはしらかべ学遊館で放映されることになっており、当会の弘前との交流がヒントとなっているようだし、会員諸兄姉にもぜひ鑑賞いただきたい。私たちの活動や、地元の古くからの資産「金魚ちようちん」が、若い人にも認識してもらえるところとは、この上ない喜びである。復元金魚ちようちんを当館にも頂いたので、それを見ながら来訪者に説明でき、幸せている。

なお、会員の岸永啓子さんが、九月から当館に勤め始められた。岸永さんは、数学の先生だが、故福本幸夫先生の令嬢で柳井市の歴史、町並みの説明、おもてなしもばっちり。新しい三人体制で今後もお客様への対応に努めますのでよろしく！



令和2年度第2四半期 町並み資料館入館者一覧

	R2/ 4-6	R2/6末 現在累計
町並み資料館		
入館者数	3,238	281,117
前年同期比	37.5%	
松島記念館		
入館者数	763	104,676
前年同期比	49.8%	

【編集後記】

・政府では「第二波」を認めずに経済対策に力を入れ、GoToキャンペーンを始めているが、柳井市にはまだその恩恵は及んでいないようです。

・半面、10月12日現在、柳井市及びその周辺4町には、まだ新型コロナの魔手は及んでおりません。一時「陸の孤島」と揶揄された立地的特徴もあるのですが、まじめで純朴なこの地区の住民の気質にもよるのではないのでしょうか？高齢者は勿論、若い働き盛りの人達も、手洗い・うがい・マスク等を欠かさず、「3密」回避の基本的ルールを守っています。また、大企業ではありませんが、この地域にも公私を問わず結構事業所はあり、その経営者(首長)・従業員(職員)の方が、極力出張や来客を避け、オンラインによる業務運営をしておられる等、素晴らしい働きだと思います。

・そういう状況下、当会の若手執行部では、伝統行事を「無観客」で開催したり、遠い青森に一人で出向いて昨年始まった柳井-弘前間の交流の芽を摘まないようにしたり、猛暑が普通となった夏の夕、白壁通りに「打ち水」をするという新しい行事を開始したりと、実に頼もしい活動をしてきております。ワクチンができるまで、皆で気を抜くことなく真摯な取り組みを続けましょう。(事務局 國森)